



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書き方のポイント : 論文・レポートを書く前に
Author(s)	多田, 泰紘
Description	主催 : 北海道大学アカデミック・サポートセンター, 北海道大学附属図書館
Relation	アカデミック・サポートセンター×附属図書館によるスキルアップセミナー「論文・レポートを書く前に : 第2回」. 平成25年2月22日(金). 北海道大学附属図書館本館2階リテラシールーム, 札幌市.
Issue Date	2013-02-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52045
Type	lecture
File Information	howto_handout.pdf, 配布資料



論文・レポートを書く前に ②

書き方のポイント

アカデミック・サポートセンター (ASC)

附属図書館

文責：ASC 特定専門職員 多田泰紘

0. はじめに

この配付資料は、読み物です。失敗レポートを山と積み上げてきた筆者の経験と、多くの諸先輩から授かった知識を著したものです。書き連ねていますが、必要なときに必要な箇所だけ読んでください。それがこの配付資料の目的です。

この配付資料が、皆さんのアカデミックな「主張」を表現する手助けとなれば幸いです。

1. 論文・レポートってなに？～アカデミックな文章の条件～

1-1. テーマと主張

論文やレポートの目的は、研究成果や活動記録を多くの人たちへアウトプットすることです。研究の過程で、実験・調査を行い、その結果を文章化して著します。

実験・調査を開始する前に、目的や、対象、目的達成のための手法を考えます。本文ではこれら目的・対象・手法をまとめて「テーマ」と呼びます。「テーマ」を具体的にすることで、あなたがこれから行う作業も明確化するはずです。

実験・調査を終えると論文・レポートを書きます。研究結果や集めた資料の情報から自分の解釈や意見を導き出す必要があります。本文ではこれを「主張」と呼びます。アカデミックな文章では、「主張」の提示が必要不可欠です。

1-2. 論文・レポートと感想文の違い

文章で自分の考えを表現するという点で、論文・レポートと感想文は似ています。しかし、これらの間には客観性という決定的な違いがあります。

感想文の性質を考えていきます。これまで、皆さんは、学校の宿題などで感想文を書いたことがあると思います。その時のことを思い出してください。まず、感想文にも論文・レポートと同様に、目的や対象があります。例えば「遠足の思い出を書く」などです。そして、自分の感じたことを表現します。例えば「川で遊んで楽しかった」などです。

次に、感想文の客観性を考えます。感想文は、読む人が限定されています。あなたが遠足に行ったことを知らない人が、感想文を読んで、思い出を共有することは難しいでしょ

う。また、感想文の内容は個人的なもので、人により大きく違います。感想を客観的に証明することは難しく、意味のないことです。「なぜみんなと遊べて楽しかったの?」と聞くことはナンセンスです。

感想文は読み手が限定され、内容も個人的な考えが述べられるだけです。他方、論文・レポートは読み手が限定されることなく、内容も客観的証拠の上に成り立つものです。実際は教員しか読まないレポートも、すべての人が読んで、理解、納得できるものでなければなりません。

1-3. 自分の「主張」を持つ難しさ

論文・レポートで気をつけるべき点は二つあります。ひとつはテーマ設定です。もうひとつは自分の「主張」をまとめ、伝えることです。

実験・調査が終了した後、その結果や情報を吟味し、解釈を引き出す作業を行います。自分の「主張」を伝えるためです。

例えば、大学のレポート課題について、次のような経験はありませんか。「資料も実験結果もそろっている、しかしどう書いてよいかわからない」「結果と考察がごっちゃになる」「考察が感想文のようになってしまう」といった不安です。「提出締め切りに間に合わせるため、参考文献から文章を切り貼りしてしまった。考察もインターネット上で見た文章をアレンジしてまとめてしまった」などの失敗経験があるかもしれません

これらは、論文・レポートの根幹にかかわる部分が欠けています（切り貼りについてはルール違反です）。自分の「主張」を述べるという点です。

本文では書き方のポイントとして、自分の「主張」を伝えることについて考えます。「テーマの再設定」「書くときのルール」「論理的な文章」について順に説明していきます。

まとめ

- ・論文・レポートは成果発表の手段のひとつ
- ・論文には「テーマ」と「主張」が含まれる
- ・「テーマ」と「主張」は客観性を持つ必要がある
- ・自分の「主張」を持つことが書き方のポイント



2. テーマを見直す～言えることを見つけるために～

2-1. 実験・調査の終了とテーマの再考

実験・調査が終了した段階で、テーマ（目的・対象・手法）を再考します。学生実験を含めた研究では、想定外の事態が起こる、時間切れですべての予定をこなせないことは日常茶飯事です。研究開始前に立てたテーマ通りに論文・レポートを書いている場合は希でしょう。これらを失敗で片づけることは簡単です。しかし、卒業論文やレポートには締め切りがあります。やり直している時間はありません。物足りないと感じても、手持ちの

資料や研究結果からテーマを再構築します。

2-2. 自分の研究を振り返る

自分の研究結果を吟味します。論文・レポートの執筆素材は、先行研究の資料と自分の研究結果です。これらをもとに自分の「主張」を組み立てていくことになります。研究結果を整理し、解釈を加えて、ひとつのテーマに沿った「主張」を展開します。

研究スタイルは大きく分けて以下の三種類あります。

1) 発見・記録型：これまでに知られていなかった現象や事象の発見。口伝等で存在していた逸話を記録・保存するなど。新発見の意義やインパクトの大きさを論じます。

2) 仮説（主張）提案型：経験則として知られていたものを仮説として提案する、一般原則について数式を用いて体系化したなど。資料をもとに自分の「主張」を提案するレポートもこれに含まれます。多くの観察事例から得られた自分の解釈を提示します。根拠の無い、ひとりよがりな解釈にならないよう注意しましょう。常識に基づいた発想が求められます。

3) 仮説証明型：これまでに提案されていた仮説の検証。あるいは例外を検証し、仮説の是非について論じたなど。証明手法の設定や、既存仮説の問題点の指摘が重要なポイントです。例外を検証する作業は時間と労力がかかるため、作業時間が比較的少ない期末レポートや卒業研究には向かないスタイルです。

まず自分が行った研究のスタイルはどれか、そして研究成果をどのように言い表すことが出来るかを考えましょう。レポートでは、集めた資料を根拠としながら、自分の「主張」を示します。結果的に内容が他人と同じになっても構いません。論文では、研究成果や「主張」に新規性が望まれます。

2-3. 「問い」と「答え」と「理由」

テーマの再設定は、これまでの研究で得た「主張」の元を拾い上げていく作業です。次の三つのポイントに注意してテーマを再設定していきます。

1) 「問い」を具体化します。研究の「目的」「対象」「手法」を文章化しましょう。研究開始前のテーマ設定と似ていますが、今回は自分の研究結果から抽出します。具体的には「なぜ、なにを、どのように研究した」を明確にします。

2) 「答え」を述べます。「主張」の核になる部分です。思いつくままに書いてはいけません。「答え」は「問い」に対応していなければならない、「理由」により裏付けされている必要があります（後述）。「答え」と「問い」は一対一対応が基本ですが、場合によってはひとつの「問い」に複数の「答え」が出てくるような場合もあります。「問い」と「答え」の間に明確な対応関係があるが重要です。

3) 「理由」を説明します。論文・レポートは「答え」に裏付けが必要です。自分の「主張」に固執し、言い過ぎてはいけません。「答え」がひとりよがりになると「主張」も飛躍して

します。「主張」は的確な「理由」があってはじめて認められます。「この『答え』の根拠は何？」と聞かれたときに答えられる「理由」を用意しましょう。

2-4. 行き詰まりを打破する

ここまでの作業が何の苦労も無く達成できるとは限りません。行き詰まってしまうこともあるでしょう。そのときは次の二点を試して下さい。

周りの人に相談します。身近な人に、分かりにくい点や筋が通っていない部分を指摘してもらいましょう。「答え」やそれを支える「理由」は誰もが理解、納得できるもので無ければなりません。自分の解釈が周りの人とずれていないか確認することが重要です。注意したいのは「こうじゃないの？」とか「私はこう思う」と提案されたときです。鵜呑みにしてはいけません。否定してもいけません。冷静にその解釈を分析しましょう。そして、その解釈が正しいと自分が納得した場合、受け入れましょう。これも自分の「主張」のひとつです。

とりあえず書いてみましょう。行き詰まったときは、あれこれ考えすぎるより手を動かしてみるのも一つの対応策です。文章化すると、間違いを見つけ修正することが容易になります。手を止めて悩むより素早く作業が進むこともあります。論文・レポートは「わかってから書いてはならない。書かないとわからないからである」(小笠原, 2009)です。重要な点は、一度書いた自分の文章に慢心せず、批判的に見直していくことです。

まとめ

- ・研究が終了したら、テーマを再設定する。
- ・自分の研究を振り返り、研究成果をまとめる。
- ・「問い」と「答え」とその「理由」を明確にする。
- ・行き詰まったら、周りの人に相談するか、とりあえず書いてみる。



3. 書くときのルール～普遍性と独創性～

論文・レポートの基本的ルールや形式を付録図に示します。参考にしてください。

3-1. 形式の普遍性

形式は既存のルールに従います。課題で書式や体裁が指定されている場合はその通りにします。詳細について指定されていない部分は既存の形式を真似するのが良いでしょう。市販されている書き方解説書も参考になります。

論文・レポートの途中で書式や体裁を変えてはいけません。読む人がテーマや主張に意識を集中できないためです。見なれない形式や、途中で体裁が変化するような文章を読むと、そちらに気が向いてしまいます。フラストレーションがたまり、途中で読むのをやめてしまうかもしれません。使い古され、見慣れた形式ほど読みやすくなります。独創性を

発揮すべきは、形式ではなく内容です。

3-1-1. 調査系レポートの構成

アンケート調査や既存データの解析型レポートの構成は以下のようになります。

1. テーマの概要： 目的や調査対象について。テーマを設定した根拠。
2. 調査内容： レポートで扱う調査対象の範囲や手法、作業について。
3. 調査結果
4. 考察： 結果の解釈と自分の「主張」
5. 引用文献・資料一覧

調査系レポートは、背景や目的が自明、あるいは課題で与えられている場合があります。課題に対する独自のアプローチ（調査対象や手法）を設定することが重要です。

3-1-2. 論証系レポートの構成

資料を読んで、自分の意見や仮説を提案する、論証系レポートの構成は以下のようになります。

1. 背景： テーマを設定した背景
2. 問題の構造と先行研究の具体例
3. 論証： 資料を解釈し、自分の「主張」を提示する。
4. 引用文献・資料一覧

論証系レポートでは、自分でテーマを設定することにポイントがあります。論証部では、自分の「主張」を展開します。資料解釈や「主張」の論じ方に注意しましょう。「3-2. 主張の独創性」や「4. 文章を論理的に作る」を参考に、独創的かつ誤解無く伝わる文章を作成してください。

3-1-3. 論文の構成

論文の構成はおおよそ以下のようになります。

1. 要約 (Abstract)： 議論の概要。要約の直後にキーワードが示されることもあります。
2. 背景 (Introduction)： 問題の背景と研究の目的。「問い」の提示。
3. 材料と手法 (Materials and Methods)： 問題解決のための研究手法と材料の紹介。
4. 結果 (Results)： 研究結果の説明、考察材料の整理にもなります。
5. 考察 (Discussion)： 結果の解釈。「問い」に対する「答え」の提示。今後の展望など。
6. 引用文献 (References, Literature cited)

学位論文など、複数の章からなるものは、2-5 が章の数だけ繰り返され、6. 引用文献の前にまとめ Summary が来ることがあります。

論文では、テーマ設定から研究、考察まですべて独自で行います（共同研究は除く）。自由度が高い反面、何をして良いか分からなくなることがあります。テーマ設定（「論文・レ

ポートを書く前に①「テーマ設定のコツ」を参照)から、研究の遂行、結果の見せ方と解釈(4. 文章を論理的に作る)までじっくり取り組んでください。文章の形式は研究分野ごとに決まっている場合が多いでしょう。同じ分野の論文を参考にします。

ここで示した形式は一般例です。研究分野・スタイルにより違いがあります。確認しましょう。

3-2. 主張の独創性

アカデミックな文章とは、資料や研究結果などの「事実」から、解釈を加えた自分の「主張」を提示するものです。「主張」が無い、他人のものである、根拠となる「事実」が示されていないものはいけません。

他人の文章を写してはいけません。盗作や切り貼りは重大なルール違反です。他人の文章を使う場合は、必ず出典を明記します。また、出典を明記すれば全て良いわけではありません。他人の文章が多すぎる場合も問題です。

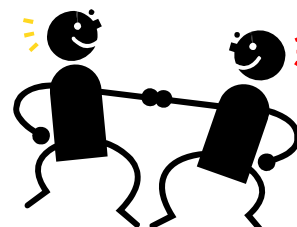
「事実」のみを列挙するのはいけません。先行研究や研究結果のまとめなど「事実」だけを述べても論文・レポートとしては成立しません。「事実」から得られる自分の「主張」を論じましょう。また、他人の「主張」を自分の「主張」としてもいけません。例えば、「本研究結果から、〇〇である(山田, 2013)。」とした場合などです。下線部は、あなたではなく山田さんの「主張」です。この書き方だとあなたの「主張」がありません。「自分の主張は〇〇である」と述べた後「自分の主張は山田(2013)と同じ結論である」とします。

感想文を書いてはいけません。「理由」による裏付けが無いと感想文になってしまいます。「主張」はオリジナリティが大切ですが、創造してはいけません。必ず証拠を挙げて下さい。個人的意見の終始、テーマ以外のことを述べるのも良くありません。テーマに沿った「主張」ではないからです。至極個人的な目的は研究テーマではありません。

自分の「主張」を作るコツは、まず、結果を見ながら言えそうなこと(解釈)を考える。次に、解釈に裏付けがあるかをチェックする。最後に、テーマと対応しているかを確認してください。

まとめ

- ・論文・レポートの形式は既存ルールに従い統一する。
- ・テーマの説明、結果の提示、「主張」の展開は必須要素。
- ・主張のコピーや感想文は御法度。
- ・結果に解釈を加え、証拠を確認し、テーマに沿った「主張」を行う。



4. 文章を論理的に作る～主張の伝達と誤解の回避～

4-1. 正しい文章

正しい文章を独力で書くことはほぼ不可能です。いきなりネガティブな話ですが、多く

の人が納得するところだと思います。書き手のちょっとしたクセや読み手の持つ知識・経験次第で「主張」は誤って伝わるかもしれません。

誤った「主張」が伝わらないように、周りの人に読んでもらうことが重要です。優秀な研究者ほど自分の文章に対する意見を求めます。これから本格的な論文・レポートを書くとするみなさんは、自分一人で正しい文章を書こうとは思わないで下さい。

4-2. 正しくない文章

正しい文章を書くことは難しいものの、自分で出来る対策もあります。「正しくない文章」を書かないことです。トンチでも意地悪クイズでもありません。「正しくない文章」を避けることは「主張」の誤解を減らす意味があります。

正しくない＝誤解を与える文章の要素として「統計マジック」と「作文トリック」があります。

4-3. 統計マジック

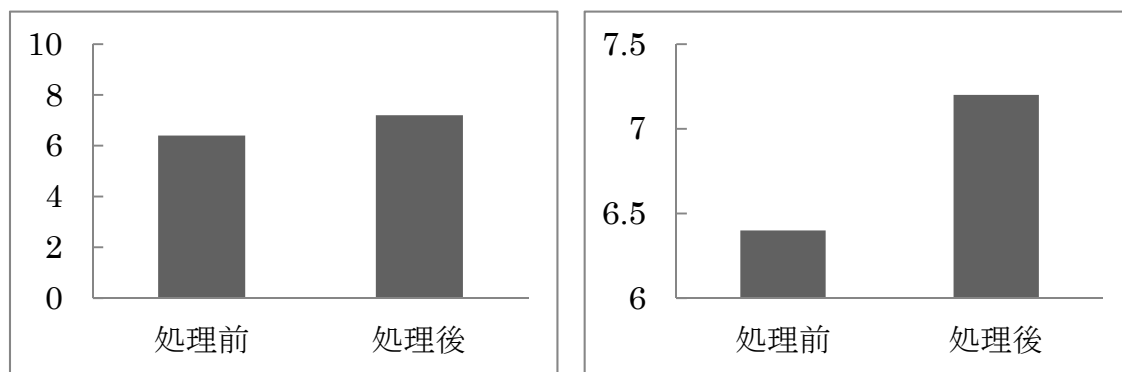
「統計マジック」と聞くと、高度なスキルを悪用するようなイメージがありますが、そうではありません。容易に見抜かれます。アカデミックなタブーとも言えます。

統計学について少し説明します。統計学は、データ（男女比や犯罪率などおよそ数値で出てくるもの全般）から「こうじゃないかな？」と感ずることを、科学的かつ誰もが使える手法で証明する理論です。データから得た感覚的な違いを科学的に証明する手法となります（「統計学」自体を研究している人にとっては違います）。科学的手法はシンプルに出来ています。人を欺くことには向いていません。注意すべき点は、悪意無く統計マジックを使ってしまうことです。以下で、詳しく説明していきます。

まず、データ収集の偏り（サンプリングバイアス）を回避しましょう。調査範囲を日本全体とするべきところで、北海道から得たデータのみで解析を行うとどうでしょう。日本全体と北海道ではデータの傾向が異なる可能性があります。その可能性を無視してはいけません。間違った解釈の素になります。気を付けたいのは、意図せずにサンプリングバイアスがかかってしまうことです。例えば、ある魚のオスとメスの比率を調査するとします。世界中の海からサンプルを集めることは難しいため、特定の海域の魚をサンプルとして使います。しかし、その特定地域が異常にメスの多い地域だった場合、異なった解釈を導いてしまいます。この場合、その特定地域についての事前情報を集める必要があります。統計手法に基づく調査をする場合は、サンプリングバイアスがかかっていないかを確認する必要があります。

次に、グラフの見せ方についてです。次ページの二つのグラフを見て下さい。二つとも同じデータから作成されています。しかし、左のグラフと比べて右のグラフは「処理前」「処理後」の差が強調されています。軸の最小値と最大値が異なるためです。右のグラフの場合、読み手は「処理前後の差を強調するために、意図的に軸の設定を動かしているのでは」

と感じるかもしれません。最近の図表作成ソフトは、軸の設定を自由に変更できます。しかし、信頼性が損なわれる設定変更は避けましょう。この場合は、左のグラフが正直です。



最後に、有意差至上主義の危険性について説明します。有意差は、統計学の用語で「科学的に意味のある差」です。例えば、A 町の人と B 町の人々の睡眠時間データについて、統計学的な解析を行いました。その結果、有意差があったとします。すると、「A 町と B 町の人では睡眠時間が異なる」あるいは「A 町の人より B 町の人より睡眠時間が長い（短い）」と解釈できます。ここまでは問題ありません。しかし、解釈の書き方に気を付ける必要があります。例えば、「A 町の人より B 町の人より平均睡眠時間が 5 分長かった」場合です。有意差は睡眠時間の違いがあるかどうかを示すもので、実際の差については言及しません。「5 分」の差は交通システムの運行上は大きな差かもしれません。しかし、一日の中では微々たる数字かもしれません。有意差のみに目が行き過ぎてはいけません。実際の差にどれくらい意味があるかを自分で判断しましょう。

4-4. 作文トリック

「作文トリック」は、読み手に誤解を与える文章表現です。意図的に読者の注意をコントロールすることで、文章の問題点（データからの逸脱、論理の飛躍）を隠す悪法です。また、悪意はなくても誤解を与える場合があります。読み手が理解にとまどう表現にならないよう注意して下さい。以下に例を挙げて説明します。

まず、議論のすり替えと飛躍です。例えば、テーマとして「日本における調査」を目的としていた場合に、「アジア全体の状況」を考察のメインに据えた場合です。テーマの「問い」と「答え」が一致していません。読み手は議論が飛躍していると感じるでしょう。「論点をわざとすり替えているのでは」と疑われるかもしれません。本筋から逸れた「主張」とならないようにしましょう。この例の場合、「問い」の中に「アジア全体との比較」を組み込んで、その「答え」として「日本の状況」を述べた後に「アジア全体」との比較を行うようにします。

次に、文脈依存についてです。文脈依存とは、暗黙の了解を押しつけることです。例えば、次のような会話には文脈依存的な表現が含まれます。

Aさん：「今日のお昼どうしよう」

Bさん：「食堂へ行こうよ」

会話としては成り立っていますが、文法上は破綻しています。Aさんの「お昼どうしよう」は何について聞いているのかが明示されていません。しかし、Bさんは食堂へ行くことを提案しています。おそらく、AさんとBさんは友人で、毎日のようにどこでお昼ご飯を食べるかを話し合っているのでしょう。二人の間に暗黙の了解があるために会話が成立するのです。しかし、論文・レポートは不特定多数の人が読むものです。文脈に依存した表現は適しません。めんどくさくても、問題の対象や詳細を明示してください。

最後に、核心の隠蔽について説明します。核心を隠す表現方法として、隠喩（メタファー）や複文があります。データの説明に擬人化した表現は必要ありません。また、構造が複雑で、主語や述語が分からない文章（複文）は核心が見えづらくなります。論文は小説や随筆ではありません。話の筋は常にオープンで分かりやすくしましょう。推理ドラマのように伏線を張る必要もありません。考察で話す項目について、必ず冒頭のテーマ説明部分で述べておきます。

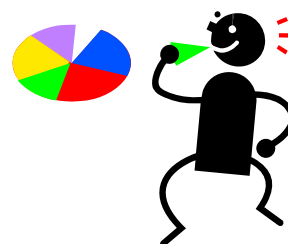
4-5. 正しくない文章を書かないために

意図的に正しくない文章を書きたい人はいないと思いますが、何気なく使ったグラフや表現が誤解を招くかもしれません。その一番の要因は、情報提示の仕方です。読み手は研究結果を知り尽くしているわけではありません。キーワードの定義が不明瞭であれば、内容を正確に理解することが出来ません。また、分野特有の専門用語も落とし穴になってしまいます。

論文・レポートではキーワードや専門用語の説明を積極的に行います。例を挙げて説明することも効果的です。抽象的であいまいな概念では無く、具体化してください。誤解が解消されるはずです。

まとめ

- ・正しくない文章を書かないようにする。
- ・「統計マジック」「作文トリック」を回避する。
- ・キーワード等の定義と説明を徹底する。



5. 筆が止まったら

テーマを再設定した。「主張」もそれを支える根拠もある。解釈も間違っていない。しかし、論文・レポートの執筆が思うように進まない、筆が止まるといった場合があります。ここではその対処法を紹介していきます。

5-1. タイトルから内容を整理する

タイトルを考えます。論文・レポートを書いている、「今書いている文章は筋が通っているのか。テーマからそれていないか」と感じる場合があります。そのような時はタイトルを付けてみましょう。タイトルは短い文章で内容を端的に表すものです。テーマが練り上げられている必要があります。タイトルを付けることで、テーマや「主張」が言葉となって明確化します。ただし、課題でタイトルが決められている場合はそれに従ってください。

論文や学会等の発表で、「〇〇の調査」「××の証明」といったタイトルを見かけますが、好ましくありません。読み手が内容をイメージできないため、テーマや「主張」が伝わりにくいからです。また、書き手がテーマをまとめきれていない可能性もあります。タイトルから内容を整理する場合は、抽象的な命題は避けてください。タイトルは「何を、どのようにして、何が分かった」を前面に出す形が理想です。例えば「アライグマの繁殖生態を活用した新しい駆除方法の開発」などです。テーマの目的、対象、方法が具体的なキーワードで示されているので、内容をイメージしやすくなります。

5-2. 開き直す

論文・レポートを書き進めていくと「文章としては出来上がっているが、どこか直せそうな部分がある」という状態に陥ることもあります。「改善する余地はあるはずだが、それがどこか分からない。考えれば考えるほど迷う。手を加えてみるものの良くなっている実感がない。前の文章のほうが良い気がしてくる」と、ここまでになると重症です。このような時は開き直ってみましょう。

まず、「4. 文章を論理的に作る」で説明したように、完璧に正しい文章を作ることは至難の業です。無理に上手な文章を作る必要はないと考えてください。誤解を与える文章でなければ十分です。文章表現の巧拙は根本的な問題ではありません。図表がスタイリッシュである必要ありません。「テーマに沿って主張を伝える」ことに専念しましょう。

次に、少しの時間放置します。これは頭の冷却期間を置くためです。人間の頭は複雑な文章をすぐ忘れます。忘れることで思考の迷路にはまった文章を客観視できます。客観視することで、矛盾のある部分が見えてくるでしょう。

最後の手段として、周りの人に見てもらいましょう。論文・レポートは他人が読んで理解できれば良いのです。周りの人に、読みにくい、理解しにくい部分を指摘してもらいましょう。ダメ出し覚悟の方法ですが、自分で悩み続けるより早く解決する場合があります。

まとめ

- ・タイトルを考えて、テーマや「主張」を整理する。
- ・思考の迷路にはまったら開き直すことも大切。



6. 論文・レポートを書くこと

最後に、筆者の「主張」を述べたいと思います。論文・レポートを研究の目的としてはいけません。レポートを出さなければ単位を得ることはできません。論文を書かなければ卒業できません。そのため、論文・レポートを書くことが目的となりがちです。しかし、論文やレポートはただ書けば良いものではありません。中身が重要です。論文やレポートは自分の成果をアピールする手段であって目的ではありません。自分なりの目的（テーマ）をもって研究に取り組んでください。

7. 論文・レポートの注意すべきルール

- 文体は「である」調にする。
「これはペンです」→「これはペンである」
- 「」内に読点はいれても、句点は基本的に入れない。引用の（）後に句点を置く。
「私は北大生の山田である。」→「私は北大生の山田である」
「彼は山田である。」（鈴木，2013）→「彼は山田である」（鈴木，2013）。
- 英数文字は基本的にすべて半角。
2012年NHK紅白歌合戦→2012年 NHK 紅白歌合戦
(例外1) 熟語
1つ→一つ
2人3脚→二人三脚
(例外2) 英文の11(または12)までの数字。*分野や雑誌等により異なる場合がある。
2 people→two people
(例外3) 縦書き文章
5 → 五
0 百
0 人
人
- 感嘆符（「？」や「！」）は控える。使う場合は一文字あけて次の文をつなげる。
これはビックリ！彼は鈴木だった。→これはビックリ！ 彼は鈴木だった。
- 生物の学名は斜体あるいは下線で表記する（自然科学系の論文に多い）。
アライグマ *Procyon lotor* L.→アライグマ *Procyon lotor* L.
→アライグマ Procyon lotor L.（手書きなどの場合）
*Lは Linnaeus の略で命名者（記載者）。記載者は斜体にしない。

8. 参考文献の紹介

小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社 2009

大学生なら持っていて損はない、論文・レポートのマニュアル本。書式の基本から、卒論のスケジュール作成、文章を書くときのコツまで幅広く紹介。文系・理系問わず対応している。新書なので携行性にも優れている。

ISBN: 9784062880213 学内所蔵：本館、北図書館、水産学部図書室

佐藤 望，湯川 武，横山 千晶，近藤 明彦『アカデミック・スキルズ(第2版) ー大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会 2012

大学生に必須の、自分で「問い」を見つけ「答え」を提示するスキルの解説書。特に情報収集とそのまとめ方に重点が置かれている。資料検索に関するテクニックも充実している。

ISBN: 9784766419603 学内所蔵：本館、北図書館

山田 剛史，林 創『大学生のためのリサーチリテラシー入門ー研究のための8つの力ー』ミネルヴァ書房 2011

学部生から大学院修士1年生向けに、研究力について書かれた入門書。授業を聞いてテーマを考えるとところから、既存情報のインプット、研究成果のアウトプットまで、8つの項目に分けて解説している。豊富なコラムや図表で具体化・視覚化が計られており、スタディ・スキル初学者でも分かりやすい内容となっている。

ISBN: 9784623060450 学内所蔵：北図書館

天野 明弘，太田 勲，野津 隆志『スタディ・スキル入門ー大学でしっかりと学ぶために』有斐閣 2008

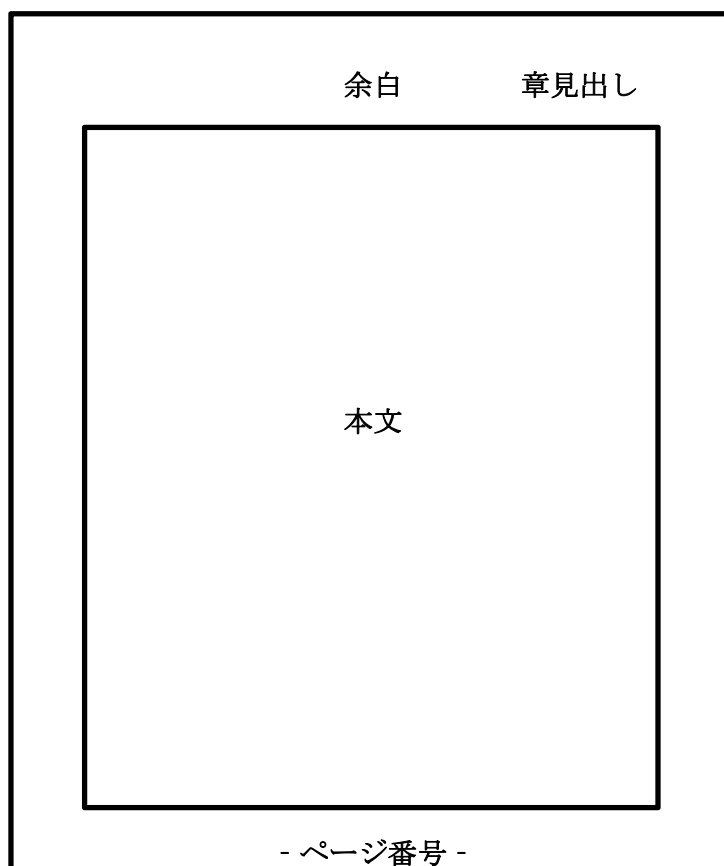
スタディ・スキルのガイドブック。論文・レポートの倫理からプレゼン手法まで、細分化されたトピックスで網羅的に解説されている。また、理系（自然科学系）論文の書き方やグラフ作成術も収録されている。

ISBN: 9784641183667 学内所蔵：本館、北図書館

阿部紘久『シンプルに書く！ー伝わる文章術』飛鳥新社 2012

「シンプル」な文章を作るための例題集。多数の事例を挙げて、文章の誤りを修正するテクニックを紹介している。長い文章≠良い文章を納得できる内容となっている。シンプルで分かりやすい論文・レポートの作成に最適の一冊。

ISBN: 97848864101905 学内所蔵：本館、北図書館



付録図 論文・レポートの基本形式（A4 縦置き）

- 余白：上 35 mm，左右下 30 mm。
横書き左綴じの場合は左 35 mm・右 25 mm、縦書き右綴じの場合は左 25 mm・右 35 ミリにして、綴じ代を確保する。
- 章見出し：長編の場合書く。書かないことも多い。
- 本文：フォントは明朝体 10.5 pt または 11 pt にする。章や節の題名はゴシック体にしても良い。
- 書式：1 行 40 字×30 行が基本。

*これらは、基本的形式であり、研究分野や雑誌によってはルールが異なっている。また、細かい部分のルールが決まっている場合もあるので注意する。